

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

・通学課程（大学院）

1. 理工学研究科	<p>(1) 物理学専攻</p> <p>①博士前期課程</p> <p>1. 教育課程編成の考え方</p> <p>物理学専攻では、人材養成の目的を達成し、現在の物理学の幅広い研究領域に対応するため、「基礎物理学分野」「宇宙物理学分野」「物性物理学分野」を設ける。又、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。更に「研究科目」を「特論科目」「演習・実験科目」に区分する。</p> <p>「特論科目」では、各分野における一般的・基礎的知識を修得させると共に、物理的思考方法を養う科目を配置する。</p> <p>「演習・実験科目」では、「特論科目」で身に付けた知識や思考力を基にして、演習や実験により、複雑な現象を整理・考察する力を養う科目を配置する。</p> <p>「論文指導科目」では、具体的ないくつかの研究課題や問題に対して、自ら解決策を見出し、更にそれを実践することで、自ら専門性を深めていく力を養うと共に、研究成果を人に分かりやすく伝える力を</p> <p>2. 教育内容・方法</p> <p>「特論科目」では、講義と演習により授業を行う。7科目14単位を選択して修得させるため、学生は自身の専門分野以外の科目も修得しなければならない。これにより、広い視野から様々な問題を俯瞰できる力を身に付けさせ、一般的・基礎的知識を修得し、更により高度な専門的知識についても理解を深めさせることができる。</p> <p>「演習・実験科目」では、演習や実験により授業を行う。理論系の科目では理論計算が主たる内容となり、実験系の科目では実験が主たる内容となる。学生の専門分野の科目を修了までの2年間にわたり、合計4科目8単位を修得させる。</p> <p>「論文指導科目」では、修士論文の作成が目標となるが、実験や計算、それらの整理に加えて、文献調査、文献講読、又、研究発表に関するスキルの修得も授業内容に含まれる。1つあるいは複数の研究課題に取り組み、想定外の様々な困難を解決する体験を通して、研究者として必要な自ら専門性を深めていく力を養う。又、この科目で得た研究成果を基に修士論文の作成のみならず、更にその成果を各種学会などで発表するように指導する。学生の専門分野に基づき研究指導を行い、修了までの2年間にわたり、合計4科目8単位を修得させる。</p> <p>3. 学修成果への評価</p> <p>シラバスに提示された科目の学修（到達）目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、修士論文については、主査や副査を中心に論文内容の精査を行うと共に、修士論文審査会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。</p> <p>②博士後期課程</p> <p>1. 教育課程編成の考え方</p> <p>物理学専攻では、人材養成の目的を達成し、現在の物理学の幅広い研究領域に対応するため、「基礎物理学分野」「宇宙物理学分野」「物性物理学分野」を設ける。又、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。</p> <p>「研究科目」では、各分野における高度な専門知識を修得するための科目を配置する。</p> <p>「論文指導科目」では、独創性、先進性、発展性に優れ、学術的かつ社会的意義を持つ博士論文研究を実施するために不可欠な高度な研究遂行能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。</p> <p>2. 教育内容・方法</p> <p>博士後期課程では、博士前期課程で身に付けた能力に加えて、一段と深い物理学の学識を持って自立して研究できる専門家、研究者を養成することを目指す。</p> <p>「研究科目」では、主として講義と演習により授業を行い、博士前期課程で修得した専門知識よりも更に高度な内容について理解を深めさせ、「論文指導科目」の主たる目的である博士論文の作成に必要な知識・技術を養う。「研究科目」の修了要件は4科目8単位であり、学生の専門分野の科目を修得することで博士後期課程の修了要件を満たすように設定している。</p> <p>「論文指導科目」では、演習や実験により授業を行う。又、博士論文の作成に必要な文献調査、文献講読、等も含む。博士論文の執筆や、自立した研究者として物理学会、物理学関連の学会などで貢献できる物理学研究を実施するために不可欠な、高度な研究遂行能力を修得させる。学生の専門分野に基づき研究指導を行い、修了までの3年間にわたり、合計6科目12単位を修得させる。</p> <p>3. 学修成果への評価</p> <p>シラバスに提示された科目の学修（到達）目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、博士論文については、博士の学位申請資格について理工学研究科物理学専攻の基準を基に予備審査を行った上、提出された学位請求論文の内容の妥当性や学術的意義・社会的意義について主査と2名以上の副査により審査する。併せて、公聴会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。</p> <p>(2) 化学専攻</p> <p>①博士前期課程</p> <p>1. 教育課程編成の考え方</p> <p>化学専攻では、専門分野を「無機化学」「有機化学」「物理化学」「分析化学」「生化学」の5分野に大別した上で、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。更に分野ごとに、「研究科目」を「特論科目」「演習・実験科目」に区分する。</p> <p>「特論科目」では、各専門分野及び関連分野における最新の技術情報及び研究成果を学ぶ。</p> <p>「演習・実験科目」「論文指導科目」では、実際の研究を通して論文作成、学会発表を念頭に置いたプレゼンテーションの指導を行う。博士前期課程では、得られた実験結果をどのように解釈し、次の実験計画を立てて研究活動を進めていくかを主眼に置いて、教育課程を編成する。</p>
-----------	---

2. 教育内容・方法

「特論科目」では、講義又は演習形式により授業を行う。5つの専門分野に関する高度な専門的知識を修得させることにより、自身の研究テーマをより主体的に遂行できる授業形態とする。少人数教育の特徴を活かし、教員と学生とのコミュニケーションが密な授業を行うことで、学生の研究活動をサポートする。

「演習・実験科目」「論文指導科目」では、修士論文作成及び口頭による研究発表を行うことを目標

3. 学修成果への評価

シラバスで提示された学修（到達）目標の達成度を課題等により評価する。修士論文においては、中間発表での研究結果及び研究に取り組む姿勢を評価する。最終的には、主査や副査を中心に論文内容を審査し、修士論文審査会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。

②博士後期課程

1. 教育課程編成の考え方

化学専攻では、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。

「研究科目」では、各自の研究分野における最新の研究動向及び研究成果を把握し、研究遂行に役立てる。

「論文指導科目」では、独創性、先進性に優れた博士論文研究の遂行を目標とし、その遂行に不可欠な研究能力を身に付けさせる。実験を通じた研究が主な活動内容となり、研究成果発表に対する批判にも耐えうる知識と考察力を修得させる。

2. 教育内容・方法

博士後期課程では、日々の研究活動を通じた研究指導、論文作成指導が主な指導内容となる。各分野における研究雑誌において、査読付き論文の受理が学位取得要件に含まれている。従って、論文作成以外にも審査意見に対するコメントに的確に回答する必要がある。通常、英語の質疑応答となり、相応の語学力が要求されるため、この点に関しても指導を行う。

3. 学修成果への評価

博士論文の審査及び公聴会における審査委員、参加者との質疑応答の適切さを評価の対象とする。又、査読付き論文も評価の対象とする。

(3) 機械工学専攻

①博士前期課程

1. 教育課程編成の考え方

機械工学専攻は、専門分野を「デザイン・加工分野」「エネルギー・環境分野」「システム・制御分野」の3分野に分け、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。更に「研究科目」を、3つの専門分野に数理工学分野を加えた「特論科目」「演習・実験科目」に区分する。

「特論科目」では、各専門分野に共通して必要な数学的知識とスキルを養うために専門科目と数理工学分野の科目を配置する。

「演習・実験科目」では、各専門分野の高度な研究手法・応用技術を修得させ、問題解決力や独創力を培う。

「論文指導科目」では、演習形式によって授業を行う。研究で得られた成果をまとめ、専門分野の学会等で発表し、修士論文にまとめる能力を育成する。

2. 教育内容・方法

「特論科目」では、機械工学の基礎となる4力学（材料力学・熱力学・流体力学・機械力学）及び各専門分野の基礎知識を修得させるための指導を行う。

「演習・実験科目」では、各専門分野の特論で得られた知識を基礎として、より実践的で高度な研究を実施するための実験及び解析手法等を指導し、修士研究を遂行するための応用力を高める。

「論文指導科目」では、修士研究で得られた成果を、各専門分野の学会発表（講演論文）や修士論文にまとめるための演習を行う。

3. 学修成果への評価

専攻科目については、シラバスに記載された学修（到達）目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、修士論文については、1年生で専攻内において中間発表会を行い、修士研究の進捗状況の評価を行うと共に、今後の学修成果向上のための指導を行う。又、2年生で修士論文をまとめ、専攻内で修士論文発表会を行うことで、主査や副査を中心に修士研究の成果について評価を行う。

②博士後期課程

1. 教育課程編成の考え方

独創的で先進的な研究を自立して遂行する能力を身に付け、グローバルに高く評価される研究開発を実施できる高度な専門的職業人及び研究者を育成するために、専門分野を「デザイン・加工分野」「エネルギー・環境分野」「システム・制御分野」の3分野に分け、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、博士前期課程よりも更に高度な教育課程を編成する。

「研究科目」では、機械工学で必須の4力学（材料力学・熱力学・流体力学・機械力学）について、先進研究開発に結び付く高度な専攻科目の「特別講義」を1年生に配置する。

「論文指導科目」では、「機械工学特別研究」を各学年に配置し、各専門分野のより高度な研究手法・応用技術を修得させる。

2. 教育内容・方法

成果公表に関する教育を実施し、各専門分野の学会における研究発表や査読付学術雑誌への論文執筆・投稿能力を向上させ、グローバルに活躍できる自立した高度な専門的職業人・研究者を育成する。

「研究科目」では、各専門分野の最先端の研究に関する高度な知識を修得させるための指導を行う。

「論文指導科目」では、博士研究で得られた成果を各専門分野の学会や査読付きの学術論文等で発表し、最終的にそれらを博士論文にまとめるための演習を行う。

3. 学修成果への評価

専攻科目については、シラバスに記載された学修（到達）目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、博士研究については、年1回、専攻内中間発表会を実施し、博士研究の進捗状況の評価を行うと共に、今後の学修成果向上のための指導を行う。又、3年生の終わりに、博士論文をまとめ、専攻内で博士論文審査会を実施すると共に、博士論文の公開発表を行い、主査や副査を中心に博士研究の成果について評価を行う。

(4) 電気工学専攻

①博士前期課程

1. 教育課程編成の考え方

電気工学における「電力・制御分野」「情報・通信分野」「物性・デバイス分野」の主要3分野に対して、幅広く高度な専門的知識と研究遂行に必要な資料収集・分析及び研究成果の発信能力、又、電気工学技術者として必要な最先端の研究並びに技術動向に関する専門的知識と技能を修得させるため、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。

「研究科目」では、研究テーマに関する高度な専門知識・技術を修得させると共に、周辺分野の知識・技術を学び、実務に関わる理解力を養う。又、電気工学に関する専門的知識及び研究成果の発信能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。

「論文指導科目」では、自らの研究課題の意義を理論的・社会的に適切に位置付け、独創性あふれる研究を遂行し、修士論文作成へと発展的な学修が可能となる科目を配置する。又、学会等での発表技能を身に付けさせることを目的とした科目を併せて配置する。

2. 教育内容・方法

「研究科目」では、講義又は演習形式により授業を行う。電気工学の各分野に関する高度な専門的知識及び関連する周辺技術の研究法に基づく、実証的な研究能力を修得させると共に、各分野の研究課題について学生が主体的・能動的に検討する教育方法も積極的に取り入れる。

「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。学術的・社会的意義のある実証的な研究の遂行、修士論文を作成するための研究指導を行う。

3. 学修成果への評価

シラバスで提示された科目の学修（到達）目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、修士論文については、主査や副査を中心に論文内容の精査を行うと共に、修士論文審査会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。

②博士後期課程

1. 教育課程編成の考え方

電気工学における高度な研究遂行能力と、研究成果を電気工学関連の学会あるいは社会に還元し、電気工学の学問的発展並びに新しい社会の創造・成長を牽引することのできる俯瞰力と独創性を身に付けさせるため、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。

「研究科目」では、「電力・制御分野」「情報・通信分野」「物性・デバイス分野」の各分野における高度な専門的知識を修得させるための科目を配置する。

「論文指導科目」では、独創性、先進性、発展性に優れ、学術的かつ社会的意義を持つ博士論文研究を実施するために、不可欠かつ高度な研究遂行能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。

2. 教育内容・方法

「研究科目」では、主として講義形式ではあるものの、演習形式に近い形態で授業を行う。本科目では、教員と学生が異なる専門性をもつ研究者同士という対等な立場に立った上で、「電力・制御分野」「情報・通信分野」「物性・デバイス分野」の各課題について互いに議論を交わすことにより、当該分野に関する先進的かつ高度な専門的知識を修得させる。

「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。博士論文の執筆や、自立した研究者として電気工学関連学会あるいは社会に貢献できる研究を実施するために不可欠かつ高度な研究遂行能力を修得させるための研究指導を行う。

3. 学修成果への評価

シラバスで提示された科目の学修（到達）目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、博士論文については、博士の学位申請資格について電気工学専攻の基準を基に予備審査を行った上、提出された学位請求論文の内容の妥当性や学術的・社会的意義について主査と2名以上の副査により審査する。併せて、公聴会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。

(5) 建築・建設工学専攻

①博士前期課程

1. 教育課程編成の考え方

建築・建設工学専攻では、様々な機能を持つ魅力的な建築空間の実現、持続可能な都市や社会基盤の構築、地震を代表とする防災技術の開発といった、新しい時代が求める幅広い建築・建設工学分野（建築意匠設計・建築計画学、構造・材料工学、建設工学、建築環境設備工学）を設ける。

幅広く高度な専門的知識と研究遂行に必要な資料収集・分析及び研究成果の発信能力、又、建築・建設の実務家に必要な専門的知識と技能を修得するため、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目（修士論文・修士設計科目）」に区分し、体系的に教育課程を編成する。更に「研究科目」を「総論科目」「専門研究科目（含演習科目）」に区分する。又、一級建築士実務要件資格の短縮を満たす科目として建築倫理科目、実務的総合科目、インターン実習科目を配置する。

「総論科目」では、専門に拘らずに幅広い分野を概観することで、新しい時代が建築・建設分野に求める柔軟な人材を養成する。

「専門研究科目（含演習科目）」では、建築意匠設計・建築計画学、構造・材料工学、建設工学、建築環境設備工学の各分野における研究の現状や課題を含む深い専門的知識を総合的に提供する科目を配置すると共に、各分野の研究法やデータ解析法に関する知識及び研究成果の発信能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。

「論文指導科目（修士論文・修士設計科目）」では、自らの研究課題の意義を理論的・社会的文脈に適切に位置付け、独創性あふれる研究を遂行し、修士論文・修士設計作成へと発展的な学修が可能となる科目を配置する。

2. 教育内容・方法

「総論科目」では、大学院担当教員全員によるオムニバス形式で授業を行う。建築・建設工学分野を幅広く概観することで、視野を広げた能力を修得させる。

「専門研究科目（含演習科目）」では、講義又は演習形式により授業を行う。建築・建設工学分野に関する高度な専門的知識及び建築・建設工学の研究法に基づく実証的な研究能力を修得させると共に、各分野の研究課題について各自が主体的・能動的に検討する教育方法も積極的に取り入れる。

「論文指導科目（修士論文・修士設計科目）」では、演習形式により授業を行う。社会的・学術的意義のある実証的な研究の遂行、修士研究（論文・設計）を作成するための研究指導を行う。

3. 学修成果への評価

シラバスで提示された科目の学修（到達）目標の達成度を中間発表及び課題により評価する。

又、修士研究（論文・設計）については、主査や副査を中心に研究内容の精査を行うと共に、修士研究（論文・設計）審査会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。

②博士後期課程

1. 教育課程編成の考え方

建築・建設工学分野における高度な研究遂行能力と、研究成果を建築・建設工学界や社会に還元し、建築・建設工学の学問的発展や新しい社会の創造・成長を牽引することのできる俯瞰力と独創性を身に付けさせるため、専攻科目を「研究科目」と「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。

「研究科目」では、建築意匠・建築計画学、構造・材料工学、建設工学、建築環境設備工学の各分野における高度な専門的知識を修得させるための科目を配置する。又、論文執筆指導と学会等での発表技能を身に付けさせることを目的とした科目を併せて配置する。

「論文指導科目」では、独創性、先進性、発展性に優れ、学術的かつ社会的意義を持つ博士論文研究を実施するために不可欠な高度な研究遂行能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。

2. 教育内容・方法

「研究科目」では、主として講義形式ではあるものの、演習形式に近い形態で授業を行う。本科目では、教員と学生が異なる専門性をもつ研究者同士という対等な立場に立った上で、建築・建設工学分野の今日的・発展的課題について互いに議論を交わすことにより、当該分野に関する先進的かつ高度な専門的知識を修得させる。

「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。博士論文の執筆や、自立した研究者として建築・建設工学界や社会に貢献できる建築・建設工学研究を実施するために不可欠な、高度な研究遂行能力を修得させるための研究指導を行う。

3. 学修成果への評価

シラバスで提示された科目の学修（到達）目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、博士論文については、博士の学位申請資格について理工学研究科建築・建設工学専攻の基準を基に予備審査を行った上、提出された学位請求論文の内容の妥当性及学術的・社会的意義について主査と2名以上の副査により審査する。併せて、公聴会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。

(6)環境システム学専攻

①博士前期課程

1. 教育課程編成の考え方

環境システム学専攻は、「環境情報系」と「環境技術系」の2つの専門領域を設け、専攻科目を「研究科目」と「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。更に「研究科目」を「共通科目」「基盤科目」「専門科目」（環境情報系、環境技術系）に区分する。

「共通科目」では、各専門領域に共通する基礎知識・技術を修得させる。

「基盤科目」では、各専門領域の専門基礎知識・技術を修得させる。

「専門科目」では、各専門領域の高度な専門知識と技術を修得させる。

「論文指導科目」では、論文指導を通じて、環境問題の解決に応用・展開する実践力・実行力を養う。

2. 教育内容・方法

「研究科目」では、講義又は演習・実験形式により授業を行う。

「論文指導科目」では、主に演習形式により授業を行い、学術的・社会的意義のある研究の遂行と修士論文作成のための実践的な研究指導を行う。

3. 学修成果への評価

シラバスで提示された科目の学修における到達目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、修士論文については、修士の学位申請資格について環境システム学専攻の基準を満たした論文を対象に、主査や副査を中心に論文内容を精査する。併せて、修士論文審査会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。

②博士後期課程

1. 教育課程編成の考え方

環境システム学専攻は、「環境情報系」と「環境技術系」の2つの専門領域を設け、専攻科目を「研究科目」と「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。更に「研究科目」を「共通科目」「専門科目」（環境情報系、環境技術系）に区分する。

「共通科目」では、「総合学外実習」を通じて高度の専門知識を実務や研究に応用する実践力を高める。

「専門科目」では、各専門領域の先端知識・技術の修得により研究能力を向上させる。

「論文指導科目」では、論文指導を通じて、環境分野における高度の技術者及び研究者としての実践力・実行力を養う。

2. 教育内容・方法

「研究科目」では、講義又は実習形式により授業を行う。

「論文指導科目」では、主に演習形式により授業を行い、博士論文の執筆や自立した研究者として研究を実施するために不可欠な、高度な研究遂行能力を修得させるための研究指導を行う。

3. 学修成果への評価
シラバスで提示された科目の学修における到達目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、博士論文については、博士の学位申請資格について環境システム学専攻の基準を満たした学位請求論文を対象に、その内容の妥当性や学術的・社会的意義について主査と2名以上の副査により審査する。併せて、公聴会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。

2. 人文学研究科

(1) 社会学専攻

① 博士前期課程

1. 教育課程編成の考え方

社会学・社会福祉学における幅広く高度な専門的知識と研究遂行能力及び研究成果の発信能力、又、専門社会調査士資格取得に必要な専門的知識と技能を修得させるため、社会学コース、社会福祉学コースの各専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。

社会学コースの「研究科目」では、現代社会学理論とその応用科目、専門社会調査士資格関連科目を配置する。

社会福祉学コースの「研究科目」では、社会福祉学理論とその応用科目を配置する。

「論文指導科目」では、社会学コース、社会福祉学コース共に学生が自らの研究テーマの意義を理論的・社会的に位置づけ、独創的な研究を遂行し、修士論文作成につなげることを目的に科目を配置する。

2. 教育内容・方法

学生が各自の研究テーマと関連付けて高度に専門的知識を修得し、修士論文の完成につなげるため、「研究科目」「論文指導科目」共に、担当教員がマンツーマンの演習形式によって授業を行う。

3. 学修成果への評価

シラバスで提示された科目の学修目標の到達度を試験若しくは課題レポートによって評価する。又、修士論文については、主査と副査を中心に論文内容を精査すると共に、修士論文審査会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。

② 博士後期課程

1. 教育課程編成の考え方

社会学・社会福祉学における高度な研究遂行能力と、研究成果を学会や社会に還元し、社会学及び社会福祉学の学問的発展や新しい社会の創造・発展に寄与することのできる独創性を修得させるため、社会学コース、社会福祉学コースの各専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。

社会学コースの「研究科目」では、最先端の現代社会学理論と、専門性の高いその応用科目並びに社会調査関連科目をそれぞれ配置する。

社会福祉学コースの「研究科目」では、最先端の社会福祉学理論と、専門性の高いその応用科目を配置する。

「論文指導科目」では、社会学コース、社会福祉学コース共に、独創性に優れ、学術的かつ社会的意義を持つ博士論文研究を行うために不可欠な高度の研究遂行能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。

2. 教育内容・方法

学生が各自の研究テーマと関連付けて高度に専門的知識を修得し、博士論文の完成につなげるために、「研究科目」「論文指導科目」共に、担当教員がマンツーマンの演習形式によって授業を行う。更に、教員と学生が異なる専門性をもつ対等の研究者同士であるという認識に立ち、社会学・社会福祉学それぞれの個別専門分野について真摯な議論を交わすことを重視する。

3. 学修成果への評価

シラバスで提示された科目の学修目標の到達度を試験若しくは課題レポートによって評価する。又、博士論文については、博士の学位申請資格に関する社会学専攻の基準を基に予備審査を行った上、提出された学位請求論文の内容の妥当性や学術的・社会的意義について主査と2名以上の副査により審査する。更に、公聴会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。

(2) 国際コミュニケーション専攻

① 博士前期課程

1. 教育課程編成の考え方

国際コミュニケーション学における幅広い知識、実践的な言語運用能力、社会・文化の多様性に関する専門的知識・理解及び課題解決能力、そして確かな研究遂行能力を修得させるため、「研究科目」「論文指導科目」で構成する教育課程を提供する。

「研究科目」では、「領域横断科目」「留学生対応科目」「コミュニケーション研究領域」「言語学研究領域」「文化研究領域」「国際社会研究領域」の科目群を設け、幅広い専門領域の研究手法や修士論文作成に有機的につながる専門的知識を修得させることを目的とした科目を配置する。

「論文指導科目」では、自らの研究課題を論理的かつ体系的に考察し、学術的な研究手法を用いて修士論文の作成を可能とする科目を配置する。

2. 教育方法の考え方

「研究科目」では、講義形式により授業を行う。国際コミュニケーション学の各専門領域に関する専門的知識を修得させると共に、講義においてはグループ学習、ディスカッション、フィールド調査等のアクティブ・ラーニングを取り入れ、専門的知識の理解と定着を図る。

「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。学術的な研究手法を用いて理論的・体系的な修士論文を作成させるための研究指導を行う。

3. 評価方法の考え方

シラバスで提示された科目の学修（到達）目標を試験又は課題により評価する。修士論文に関しては、主査・副査を設置して内容を審査すると共に、公開の口頭試問を行うことによって公平な評価を行う。学会発表や学術誌論文等も、学修プロセスにおける達成度の評価対象とする。

② 博士後期課程

	<p>1. 教育課程編成の考え方 国際コミュニケーション学における高度な専門的知識・理解と専門領域における自己の研究の位置づけを的確に把握し、自立した研究者としての研究遂行能力を修得させるため、「特殊研究科目」「論文指導科目」で構成する教育課程を提供する。 「特殊研究科目」では、博士前期課程の「コミュニケーション研究領域」「言語学研究領域」「文化研究領域」「国際社会研究領域」の4つの領域をより高度専門化し、科目を配置する。 「論文指導科目」では、3年間を通じて、博士論文作成のための高度な研究遂行能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。</p> <p>2. 教育方法の考え方 「特殊研究科目」では、講義形式により授業を行う。国際コミュニケーション学の各専門領域に関する高度な専門的知識を修得させると共に、ディスカッションを通じ、学生が博士課程に相応しい研究を進める上で必要な知識、課題発見能力、研究成果の発信力を修得させる。 「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。国内外における学会での口頭発表や専門学術誌への論文投稿を指導の一環として義務付け、研究成果の集大成となる博士論文作成へと導く研究指導を行う。</p> <p>3. 評価方法の考え方 シラバスで提示された科目の学修（到達）目標を試験又は課題により評価する。博士論文に関しては、博士論文審査委員会を設置、外部審査委員を加えて審査すると共に、口頭試問による最終試験及び公聴会を経ることによって公平な評価を行う。学会発表や学術誌論文等も、学修プロセスにおける達成度の評価対象とする。</p>
3. 情報学研究科	<p>情報学専攻 ①博士前期課程</p> <p>1. 教育課程編成の考え方 急速に進展するグローバルな高度情報社会を支える情報技術分野において、より先進的な専門知識と技術を身に付け、それらを活用して、新しい時代の技術課題を実践的に解決できる应用能力を持った人材を養成するための教育課程を編成する。 このため、情報工学及び関連分野の専門知識を系統的に理解し、専門分野における研究能力を獲得することができるよう、専攻科目を「講義科目」と「論文指導科目」に区分して科目を設置する。</p> <p>2. 教育内容・方法 「講義科目」では、専門知識を系統的に理解できるよう、講義と演習を組み合わせる。 「論文指導科目」では、修士論文執筆のための研究能力が身に付けられるよう、専門分野での輪講、演習、実験を行う。</p> <p>3. 学修成果への評価 「講義科目」では、科目ごとの到達目標、評価の方法に従い評価を行う。 「論文指導科目」及び修士論文では、高度な専門知識を有し社会に貢献できるかを基準に評価を行う。</p> <p>②博士後期課程</p> <p>1. 教育課程編成の考え方 急速に進展するグローバルな高度情報社会を支える情報技術分野において、より先進的な専門知識と技術を身に付け、それらを活用して、新しい時代の技術課題を主体的に発見・設定し、実践的に解決できる高度な应用能力を持った人材を養成するための教育課程を編成する。 このため、情報工学及び関連分野の先端的な専門知識を系統的に理解し、専門分野における高度な研究能力が獲得できるよう、専攻科目を「講義科目」と「論文指導科目」に区分して科目を設置する。</p> <p>2. 教育内容・方法 「講義科目」では、先端的な専門知識が系統的に理解できるよう、講義と演習を組み合わせる。 「論文指導科目」では、学術論文、ひいては博士論文執筆のための高度な研究能力が身に付けられるよう、専門分野での輪講、演習、実験を行う。</p> <p>3. 学修成果への評価 「講義科目」では、科目ごとの到達目標、評価の方法に従い評価を行う。 「論文指導科目」及び博士論文では、高度な研究能力を有し国際社会に貢献できるかを基準に、学外への論文発表等を勘案し評価を行う。</p>
4. 経済学研究科	<p>応用経済学専攻</p> <p>1. 教育課程編成の考え方 応用経済学専攻は、「経済専門コース」「企業マネジメントコース」「会計・税務コース」の3つのコースを設け、専攻科目を経済学の基礎的素養を修得するための「コア科目」、各コースに対応した「応用科目」、及び「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。 「コア科目」では、経済学の基礎的知識と実証的分析手法を修得させる。 「応用科目」では、修士論文執筆に必要な各応用分野の専門的知識と実証研究の手法を修得させる。 「論文指導科目」では、自らの研究課題を論理的かつ体系的に考察し、学術的な研究手法を用いて修士論文を作成させる。</p> <p>2. 教育内容・方法 「コア科目」「応用科目」による知識教授を主眼にした教育と「論文指導科目」による論文執筆指導を通じた個別教育を組み合わせる。論文指導においては、修士論文作成に向けた研究指導を行うと共に、実践的なプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を身に付けさせるための指導を行う。指導の過程では、研究ワークショップを定期的開催し、進捗度を報告させると共に、複数の教員から意見及び指導を受ける機会を提供する。なお、「会計・税務コース」においては、税務スペシャリスト養成の観点から、税理士試験科目免除を目的とする税法論文の作成に資する応用科目を充実させ、税法研究者・実務経験者による論文指導を行う。</p> <p>3. 学修成果への評価 科目の評価においては、シラバスで提示された科目の到達目標の達成度を試験又は課題等により評価する。修士論文の審査あるいは特定課題研究の最終試験においては、複数の教員からなる修士論文審査委員会によって評価を行う。評価においては、別に定める所定の水準を満たしていることが求められる。</p>

5. 教育学研究科	<p>教育学専攻</p> <p>①博士前期課程</p> <p>1. 教育課程編成の考え方 教育学専攻では、人材養成の目的を達成するため、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。また、幼・小・中・高教諭及び特別支援学校教諭の専修免許状の取得可能な教育課程を編成する。 「研究科目」では、教育思想、教育課程、教育方法、教育行財政、教育心理、保育課程、保育内容、障害児者教育、教科教育学等の各領域における研究の現状や課題、教育事象や教育実践上の現代的課題を含む、深い専門的知識を総合的に提供する科目を配置する。 「論文指導科目」では、様々な教育事象や教育実践に関し、自ら問題を発見し、既存の法則や理論を検証しつつ新たな法則や理論を帰納的に導き出し、問題の解決に向けて理論と実践の往還に寄与し得る研究を遂行し、修士論文作成への発展的な学修が可能となる科目を配置する。</p> <p>2. 教育内容・方法 「研究科目」では、講義又は演習形式により授業を行う。教育学の各領域に関する高度な専門的知識・技能と、教育学各領域の研究法と倫理に基づく実証的な研究能力、並びに社会に貢献しうる高度専門職業人としての専門性や技能を修得させる。そして、各領域の研究課題について、学生に主体的・能動的に検討させる教育方法を積極的に取り入れる。 「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。倫理を踏まえ学術的・社会的意義のある実証的な研究を遂行し、修士論文を作成するための研究指導を行う。</p> <p>3. 学修成果への評価 シラバスで提示された科目の学修（到達）目標の達成度を試験又は課題により評価する。また、修士学位論文については、主査と副査で構成された修士論文審査委員会が、提出された修士学位論文の審査及び最終試験を行う。併せて、修士論文審査会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。</p> <p>②博士後期課程</p> <p>1. 教育課程編成の考え方 教育学専攻では、人材養成の目的を達成するため、専攻科目を「研究科目」と「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。 「研究科目」では、教育学の各領域における今日的・先進的な課題に関する高度な専門的知識を修得させ、諸理論を発展的・創造的に論究することを目的とした科目を配置する。 「論文指導科目」では、投稿論文の執筆に必要なアカデミックライティング法や学会等での発表技能を修得させ、独創性、先進性、発展性に優れ、学術的かつ社会的意義を持つ博士論文研究を実施するために不可欠な高度な研究遂行能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。</p> <p>2. 教育内容・方法 「研究科目」では、主として講義形式ではあるものの、演習形式に近い形態で授業を行う。本科目では、教員と学生はそれぞれ独自の専門性をもつ研究者同士という対等な立場にほぼ準じた上で、教育学の各専門領域の今日的・発展的課題や最新の研究成果について互いに議論を交わすことにより、当該領域に関する学際的、先進的かつ高度な専門的知識を修得させる。 「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。博士論文の執筆や、自立した研究者として教育諸科学や社会に貢献できる研究を実施するために不可欠な、高度な研究遂行能力を修得させるための研究指導を行う。</p> <p>3. 学修成果への評価 シラバスで提示された科目の学修（到達）目標の達成度を試験又は課題により評価する。また、博士論文については、博士の学位申請資格について教育学研究科教育学専攻の基準を基に中間審査を行った上、提出された学位請求論文の内容の妥当性及学術的・社会的意義について主査と2名以上の副査により構成された博士論文審査委員会が、提出された博士学位論文の審査及び最終試験を行う。併せて、公聴会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。</p>
6. 心理学研究科	<p>心理学専攻</p> <p>①博士前期課程</p> <p>1. 教育課程編成の考え方 心理学における幅広く高度な専門的知識と研究遂行に必要な資料収集・分析及研究成果の発信能力、又、心理実践家に必要な心理臨床に関する専門的知識と技能を修得させるため、「研究科目」「実習科目」「論文指導科目」で構成する教育課程を提供する。 「研究科目」では、一般・基礎心理学分野と臨床心理学分野の各領域における研究の現状や課題を含む深い専門的知識を総合的に提供する科目を配置すると共に、心理学研究法やデータ解析法に関する専門的知識及び研究成果の発信能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。 「実習科目」では、心理実践家としての高い倫理観と心理臨床に関する専門的知識・技能を修得させることを目的とした科目を配置する。 「論文指導科目」では、自らの研究課題の意義を理論的・社会的文脈に適切に位置付け、独創性あふれる研究を遂行し、修士論文作成へと発展的な学修が可能となる科目を配置する。 なお、博士前期課程では、公認心理師及び臨床心理士資格の受験資格を満たす教育課程を編成する。</p> <p>2. 教育方法の考え方 「研究科目」では、講義又は演習形式により授業を行う。心理学の各専門領域に関する高度な専門的知識及び心理学の研究法に基づく実証的な研究能力を修得させると共に、個々の領域の研究課題について各学生が主体的・能動的に検討する教育方法も積極的に取り入れる。 「実習科目」では、実習形式により授業を行う。学内での事前指導を充分に行った上で、「保健医療」「福祉」「教育」「司法・犯罪」「産業・労働」の幅広い臨床領域における心理実践の方法を、各現場の実習指導者との緊密な連携のもと体験的に修得させる。 「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。学術的・社会的意義のある実証的な研究の遂行、修士論文を作成させるための研究指導を行う。</p>

3. 評価方法の考え方

シラバスで提示された科目の学修（到達）目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、修士論文については、主査や副査を中心に論文内容の精査を行うと共に、修士論文発表会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。

②博士後期課程

1. 教育課程編成の考え方

心理学における高度な研究遂行能力と、研究成果を心理学界や社会に還元し、心理学の学問的発展や新しい社会の創造・成長を牽引することのできる俯瞰力と独創性を身に付けさせるため、「特殊研究科目」と「論文指導科目」によって構成する教育課程を提供する。

「特殊研究科目」では、一般・基礎心理学分野と臨床心理学分野の各領域における高度な専門的知識を修得させるための科目を配置する。又、投稿論文の執筆に必要なアカデミックライティング法や学会等での発表技能を身に付けさせることを目的とした科目を併せて配置する。

「論文指導科目」では、独創性、先進性、発展性に優れ、学術的かつ社会的意義を持つ博士論文研究を実施するために不可欠な高度な研究遂行能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。

2. 教育方法の考え方

「特殊研究科目」では、主として講義形式ではあるものの、演習形式に近い形態で授業を行う。本科目では、教員と学生が異なる専門性をもつ研究者同士という対等な立場に立った上で、心理学の各専門領域の今日的・発展的課題について互いに議論を交わすことにより、当該領域に関する先進的かつ高度な専門的知識を修得させる。

「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。博士論文の執筆や、自立した研究者として心理学界や社会に貢献できる心理学研究を実施するために不可欠な、高度な研究遂行能力を修得させるための研究指導を行う。

3. 評価方法の考え方

シラバスで提示された科目の学修（到達）目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、博士論文については、博士の学位申請資格について心理学研究科心理学専攻の基準を基に予備審査を行った上、提出された学位請求論文の内容の妥当性や学術的・社会的意義について主査と2人以上の副査により審査する。併せて、公聴会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。